学びの現場

同志社大学神学部

宗教入り口 世界知る

キャンパス内の同志社礼拝堂を見学する小原教授（左）と学生たち。建物は重要文化財に指定されている（京都市上京区で）＝大西健次撮影

教義の違い理解

「神学」とは、古めかしい響き。いったい、何を学ぶのか。

入り口は身近なところから。同志社大はキリスト教プロテスタントの伝統を持つ。1年生は、神学部のある今出川キャンパス（京都市上京区）内の礼拝堂を見学するほか、学外の他の宗派の教会にも足を運ぶ。

「聖堂にキリストの絵が飾られていた」「香がたちこめていた」。教室に戻って見たものを報告しあうと、プロテスタント、カトリック、東方正教などで、聖堂の様式や儀式の作法が異なることに気づく。そこから宗派の歴史、教義の違いも見えてくる。

神学部で取り上げるのはキリスト教だけではない。イスラム教やユダヤ教のほか、宗教が影響を与える世界の国や地域の価値観を学ぶ。小原克博教授(48)の専門は比較宗教学。「宗教は自然への畏敬や死への不安など普遍的な感情から生まれ、あらゆる営みの底流にある。宗教の違いを知れば、他国の文化や歴史、国際情勢への理解が深まる」と語る。

聖職志望は数人

1学年60～70人のうち聖職者を志すのは数人。学生の多くは、歴史の勉強で登場する宗教や、あるいはニュースで聞くイスラム社会への好奇心から入学する。3年生からのゼミでは、それぞれが卒業論文のテーマについて調べたことを報告し、他の学生の意見を聞く。「ワインとキリスト教」「科学と宗教は対立するか」「出生前診断をめぐる神学的考察」……。議論は、神学を入り口に幅広い分野に及ぶ。

キリスト教徒は21億人、イスラム教徒は15億人で、両者で全世界人口の過半数を占める。日本では無宗教を自認する人が多いが、そう話すと、奇異な目を向けられることもある。「日本で一般的な価値観が他の国では通じないこともある。それを知ることが国際人としての第一歩になる」と小原教授。門戸は狭く見えても、奥の深い学問だ。

（森重孝）

熱中講義

学生の声

4年西澤雅登さん(23)「入学後初めてムスリム（イスラム教徒）の友人ができた。信仰上の理由で豚肉を食べないので、食事に誘う時は店を考える。異文化圏の人への気遣いを学ぶ貴重な経験になる。将来は海外で活躍するのが夢」

4年奥村奈央さん(21)「高校の世界史で『哲学は神学の婢（はしため）』という言葉を教わり、進学した。科学が発達した現代でも、宗教は生命倫理などの論議に影響を及ぼしていると知り、終末期患者のケアと宗教との関わりに関心を持つようになった。卒業後は福祉関係の仕事に就きたい」

新島襄 愛用した聖書

大学創立者の新島襄（1843～90年）＝写真、同志社大提供＝愛用の聖書が、今出川キャンパス内の「ハリス理化学館」ギャラリーで展示されている。革張りの表紙を開くと、牧師として説教する際に引用するためか、英文のあちこちに赤や青の印が記されている。

新島がアメリカ滞在中に友人のJ・M・シアーズから贈られた。資産家のシアーズは、新島の帰国後も支援を惜しまず、自宅や教会の建設費を寄付した。聖書は新島の死後、一時、教え子で戦前の言論界の重鎮となった徳富蘇峰（1863～1957年）が所蔵していたが、1953年に大学側に寄贈された。

社史資料調査員の小枝弘和さん(38)は、「知識の獲得だけでなく、内面的な成長を大切にする大学の教育理念の象徴」と語る。

新島や妻・八重(1845～1932年)の遺品、資料などは学内に約2万点所蔵され、同館で順次公開されている。

展示されている新島襄の聖書。建学の理念の象徴でもある

うちの自慢

横顔

神学部は文学部と共に1875年の大学創立時からの伝統を誇る。欧米では珍しくない学部だが、国内では少なく、文部科学省などによると、ほかには5大学にしかない。

キリスト教、イスラム教、ユダヤ教という、いずれも中東で誕生した三つの一神教を専門にする教授がおり、本格的に学べる。そのための語学にも力を入れ、英語やドイツ語、フランス語、中国語、アラビア語、ヘブライ語など計11種類が履修できる。

大学として32か国136大学への留学枠があるほか、神学部で独自にイスラエル、韓国、台湾の大学に留学枠を持つ。

学科は神学科のみ。学生数（2013年4月末現在）は男子138人、女子158人の計296人。卒業生の多くはメーカー、流通、金融、マスコミなど一般企業に就職するほか、公務員の道に進む。